

も失禮の至りであれば、一と先づ、れて筆を止めて置く。
終りに、青森地方の研究者の、大々の奮闘を望んで止まないの
である。

寢前小話

健堂生

大下先生の『水彩寫生旅行』が出版された、僕想ふに此の冊子
こそ出刊界にレードを破つた物であると。

二十有餘の紀行文と數十の繪は實際見て居て暑熱の夏をも忘れ
しむ文も繪も雜誌『みづゑ』で見たものも多いが、然し何回見て
もあきぬ書籍である。

僕は此の本を友として初秋旅立つ考へてある、秋が來た、秋
だ。秋と旅は密接なるものであると思ふ、僕は四季中秋が一番
好きだ、木が紅葉するからでも氣が晴々するからでもない。僕
は唯秋と云となんとなく戀しい、僕の歌は先天的に秋に酔ふて
居るかも知らない、何んとしても秋は好い。

僕は想ふに、天才は決して淫靡放逸なる精神に宿る能はざる
也だから、我々の如き一の物好きに依つて美術を學ばんとする
者でも、心は常に神聖に保たれたいと思ふ、精神の腐つた者は
如何なる技術があり、如何なる好材料を持つても繪は好く出來
ないと思ふ。二十錢の繪具でも精々たる心の者は立派な繪を作
る、我々は唯空想にばかり走らずに一步步進まねばなるまい
と思ふ。

僕等の様な者は、日曜以外は日々の業務に忙しいので書物を
見る事も繪を書く事も出來ない、僕は日曜に繪を習ひ本を讀
む様にして居る、『みづゑ』原稿は氣の向いた晩寝る前に書く様
にして居る。

僕は自然の子として、自然にはなれたいのである。人間
と云ふものは、自然の美、自然の慰安を欠いたなら自己の生活
が一步一步墮落の底に行く事を諸君にも自覺して欲しい、一事
の欲に迷はされると大切な藝術は滅亡してしまふと思ふ。

春鳥會正會員

遠洲濱名郡富塚村馬生

山本貞次郎

Yo Takahashi Photograph P.O. Box 14 Bantan chima

山口慎吉

次號の豫告(八十五號、三月三日發行)

口繪として故大下氏、後藤工志氏、水野以文氏、他に一枚未定
の分共)等四葉の原色版を挿入すべし。

挿繪は丸山晚霞氏のスケッチ(木版)。日本水彩畫會新年會餘興
舞臺面と觀覽席を寫真版として出すべし。

記事の主なるものは石川氏の『水彩畫用紙の談』。眞野氏の『寫
生用透視畫法』。服部嘉香氏の『ナイト氏の繪畫概論』。日本水彩
畫新年會の記事、故大下氏遺稿、スツデオ紹介等を掲載す。